

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007年～2009年

課題番号：19530592

研究課題名（和文） 教師の勇気づけ実践が児童の学級適応過程に及ぼす影響

研究課題名（英文） The effects of teachers' encouragement on students' classroom adjustment

研究代表者

古城 和敬 (KOJO KAZUNORI)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：00145351

研究成果の概要（和文）：本研究は、教師の勇気づけ実践が児童の学級適応過程に及ぼす影響を実験的に検討することを目的とした。教師にまず勇気づけの訓練を実施し、その終了時点から、各自の学級で勇気づけを実践するよう求めた。学級適応など各測度は、実践前、実践中(1ヶ月経過時)、および実践後に測定した。その結果、一部の測度において、勇気づけ実践が児童の学級適応に肯定的な影響を及ぼすことが明らかになった。さらに、実践学級の抽出児の教師に対する態度構造等の質的分析でも肯定的な変容が確認され、勇気づけ教育の学級指導への適用可能性が考察された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to investigate the effects of teachers' encouragement on their students' classroom adjustment experimentally. A 2(experimental classes vs. controlled classes) × 3(measurement periods: pre vs. a month later vs. post) factorial design was used. After learning of the encouragement theory and techniques, teachers were asked to practice the encouragement in their own classes for two months. The results suggested that teachers' encouragement had positive effects on students' adjustment partially. It was found that the encouragement was applicable to classroom management and student guidance in Japanese school education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：教育社会心理学

科研費の分科・細目：教育心理学・3902

キーワード：勇気づけ、学級適応、教師期待の認知、学級経営、生徒指導、教師と児童の人間関係

1. 研究開始当初の背景

(1) いじめや不登校の問題の解決が叫ばれて久しく、また、沈静化したような印象を与える学級崩壊の現象も解決したわけではない。こうした問題の解決は、第一義的には、教師の学級経営や生徒指導の力量にかかっている。それと同時に、児童・生徒の対教師関係、級友関係、学習意欲など日常レベルで生じる学級適応の問題の予防的対処も、教師の普段の指導態度・指導行動に大きく依存している。

(2) 特に近年の教育動向や学習指導要領からは、基礎・基本の学力とともに、『子どもの個性を生かす』視点が重要視され、個別の子どものよさを積極的に見だし、その可能性を伸ばすような具体的な教師行動として、励ましやサポートが重要であると読み取れる。この種の励まし行動は、最近子育ての分野で注目されている「勇気づけ」の概念とほぼ同義である(古城,2006)。

(3) 「勇気づけ」とは、親が子どもの長所や能力に注目し、賞賛に頼らずに子どもの自立心や責任感を育成していく理論と技法の総称である。その技法の一つ、「反映的聴き方」は、子どもからのコミュニケーションに共感的・受容的な態度で接し、彼らの感情や意思を整理してフィードバックする方法である(柳平, 1982; 古城, 1999)。

(4) 多様な個性・背景をもつ児童・生徒に向き合う教師の資質として、最近カウンセリングマインドの重要性が指摘されているが、勇気づけはまさにその要件を充たし、教育指導への効果が大いに期待され、その実践の蓄積によってevidence-basedの新しい教育指導理論の構築も図られると見込まれる。

以上の問題意識から、著者は、教師の勇気づけの教育実践への適用可能性を実験的に検討する着想に至った。

2. 研究の目的

(1) 上記の問題意識に基づいて、筆者(古城ら, 1997など)は、まず探索的に勇気づけの学級指導への適用可能性を探るため、一定の訓練を受けた教師に勇気づけの実践を依頼し、それによる単一学級(古城ら, 1998)および複数学級(古城, 2006など)の学級集団過程の変容を検討した。その結果、教師の勇気づけが児童

の学級雰囲気認知(学級適応の一指標)を肯定的に変化させることが部分的に認められた。(2) しかし、これら先行研究では、教師に約20時間に及ぶ勇気づけのトレーニングを行い、その後一定の実践期間を要するため、単年度に収集できる標本数に限界があり、知見の一般化には至っていない。また勇気づけの効果が安定的に現れる実践期間の確保にも課題が残った。

(3) そこで本研究は、アクション・リサーチ的な考え方に基づいて、より多くの学級を対象として、教師の勇気づけ実践が児童の学級適応過程に及ぼす影響を、統制学級との比較の下でより長期間にわたって検討することを目的とした。さらに、勇気づけ実践の効果に関する質的な検討を行うため、一定の基準で抽出した児童と、勇気づけを実践した教師に定期的な面接を行い、学級に対する態度構造や勇気づけ実践に対する態度構造の変容過程を詳細に記述・分析することとした。

3. 研究の方法

(1) 研究参加者：大分県下の公立小学校1年、2年、3年、6年の6学級の児童161名およびそのうちの実践学級の担任教師4名。

(2) 実験計画：学級(実践学級vs. 統制学級)×測定時期(事前vs. 中間vs. 事後)の2×3の要因計画。実践学級(4学級)では、担任教師が意図的・継続的に勇気づけ実践を行った。統制学級(2学級)では、そうした操作は一切行わない。第2要因のみ被験者内要因。

(3) 従属変数(測度)：

①学級適応 SMT(学級適応診断検査、日本文化科学社刊)の中から「教師との関係」「学校・学級への関心」「級友関係」「学習意欲」を測定する項目、各5項目、計20項目(5段階評定)。

②学級雰囲気 根本(1983)に基づいて古城ら(1989)が因子分析により抽出した項目で構成されるSD法尺度(「秩序」因子と「快適」因子からなる。例：「いごちのよいーいごちのわるい」など。5段階評定)。

③教師期待の認知 古城ら(1991)の尺度を用いる(5段階評定)。

(4) 手続き：

①教師の勇気づけの訓練；各年度の夏休みに、

実践学級担任の教師を集め、「STEP勇気づけ」(柳平, 1982)のプログラムに基づいて、専門のインストラクター(有資格者)の指導のもとで9セッション計20時間(4日間)訓練し、勇気づけの基本的態度と実践的な技法を習得させた。

②2学期の初めに、上記の従属変数を組み込んだ質問紙を実践学級と統制学級の児童に配布し、回答を求めた。この回答に基づいて、実験学級においては、学級適応が低い児童または教師期待を低く認知する児童を各学級で数名(計14名)抽出した。

③その直後から実践学級の教師に勇気づけを2ヶ月間継続的に実践するよう要請した。

④勇気づけ実践を開始した直後、実践学級の教師と抽出児に対して個別の面接を行った。抽出児には「学級に対する態度」と「教師に対する態度」について自由に回答を求めた。教師には「学級に対する態度」や「勇気づけ実践による自己の変化」について自由回答を求めた(態度構造の変化を追跡するための初回面接および調査)。

⑤実験者は定期的に学級を訪問し、その間の実践について教師の自己報告(誰にどのような内容の勇気づけを行ったか、など)を求め、勇気づけが継続的に行われていたかをチェックした。

⑥1ヶ月後に、②の質問紙を全児童に再度実施した。また、④と同様に、実践学級の抽出児と教師に面接を行った。教師には途中経過の内省も求めた(態度構造の変化を測定するための第2回面接および調査)。

⑦2ヶ月後の実践終了時点で上記の質問紙を全児童に実施し、④と同様に抽出児と教師に面接を行った。教師には最終的な内省も求めた(態度構造の変化を測定するための最終第3回面接および調査)。

⑧統制学級においては、②の手続き以降は、実践学級の⑥と⑦の時点で、実践学級と同一の質問紙を児童に実施し、回答を求めた。

4. 研究成果

(1)分析においては、まだ標本数が十分でないため従来のデータも加え、学級単位のデータと児童個人単位のデータについて、条件(実践学級 vs. 統制学級)×測定時期(実践前 vs. 実践中 vs. 実践後)の2×3の2要因分散分析をそれぞれ実施した(小学1～2年の学級を除き総計20学級で分析)。その結果、学級単位データの「教師期待の認知」測度において期待された交互作用が有意であった($F=5.32$, $df=2/36, p<.05$)。下位検定を行うと、実践前と

実践中の両学級間の評定値には差がないが、実践後においては実践学級の方が認知得点が高いことが認められた。児童個人単位のデータの「教師期待の認知」でも有意ではないが同様の傾向が見られた。

(2)これに加えて、本研究では、実践学級の抽出児の「学級および教師に対するイメージ」の変容過程と、担任教師の「勇気づけに対するイメージ」の変容過程をPAC分析によって質的に検討した。

①14名の抽出児のほとんどが肯定的な変容を示したが、ここでは2名についてのみ以下に示す。抽出児A児の態度構造を見ると、実践前の面接では、教師に対して「こわい」「すぐ怒る」なすべて否定的イメージであったが、実践後には「しんけん(な態度)」というような肯定的イメージに変容していた。教師は「実践前は、A児のためだと思って厳しく注意することが多かったが、実践を始めてから『反映的な聴き方』や『I-メッセージ』の技法を使ってA児と話をした」と述べていた。教師が実践前とは異なり、C児の話に傾聴し受容的に接し、A児のよい面に注目して実践を続けたことで、A児は教師から認められているという感覚をもつに至ったと考えることができる。

B児は、実践前の面接では学級に対して「さわがしい」「まとまっていない」というような否定的なイメージをもっていたが、実践後ではそのようなイメージはなくなり、「にぎやか」「なごやか」「おしゃべり」といった肯定的なイメージが増えていた。担任教師の認知においても、「実践前より宿題や提出物をきちんと提出するようになった。また自主学習の内容も充実してきた」といった変容が報告された。行動観察においても、実践を始めてから担任教師はB児とも関わりをもつことが多くなり、教師自身も「今までよりも宿題や日記に丁寧なコメントをしたり、教師が見ているということを示すようにした」と述べており、こうした教師行動がB児の学級適応に肯定的な影響を及ぼしたといえるかもしれない。

②実践学級の教師の態度構造の変容については2名の教師の面接記録を引用する。3年生担当のC教師は、実践当初は「自分の行っていることが本当に勇気づけになっているのだろうか」と今までの指導方法との違いに違和感を覚え、不安になっている様子が見られた。しかし、実践を継続していくうちに、「勇気づけを実践していくことで、問題を一方向からだけでなく、客観的に捉えることができ

るようになった」「子どもたちの話を十分に受け止められるようになった」というような態度構造に変容していた。また、6年生担任のD教師も「勇気づけに対しては、(当初は)不安があったけれど、学級の雰囲気は、事後は本当に明るくなった」と学級全体の変容から勇気づけの肯定的な効果を認識する発言が見られた。

(3)これらの結果は、勇気づけ実践が児童の学級適応過程に肯定的な影響を及ぼすことを量的・質的に示している。勇気づけの教育実践への適用可能性はひじょうに高いと考えられ、今後のさらなる実証的研究が求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

①古城和敬，シンポジウム：STEPを活用した学級づくり(指定討論者)，日本教育カウンセリング学会，2009年11月28日，鎌倉女子大学

②古城和敬，シンポジウム：人間関係と学力を両立させた教育実践－学校教育へのSTEP導入の試み(司会)，日本教育カウンセリング学会，2008年11月29日，聖徳大学

③古城和敬・恒光朋宏・二宮由香，教師の勇気づけ実践が児童の学級適応過程に及ぼす影響(3)－教師の態度構造の質的な変容過程の検討，九州心理学会第68回大会，2007年11月11日，別府国際コンベンションセンター

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古城 和敬 (KOJO KAZUNORI)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：00145351

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：